

文学による沖縄からブラジルまでの繋ぎをマップする

ウェルチ シャノン

1908年には、日本からブラジルまでの最初の移民船である「笠戸」が旅立つ時、移民781人の中で355に人(約44%)が沖縄出身者であった。しかし、主にその歴史が語られたら、全員が日本人と頻りに呼ばれ、移民の出身に関する不釣合いにあまり触れない。一体なぜその詳細を省くであろうか。当ポスターは、沖縄系ブラジル移民文学への分析を通して、沖縄と日本とブラジルが繋がっている歴史を見直す。特に、目取真俊が書いた1999年の小説「ブラジルおじの酒」と大城立裕が書いた1985年の小説「ノロエステ鉄道」を取り上げ、20世紀初頭に沖縄からブラジルまで移住した人々の体験を作品がどのように描写するかを分析する。「ブラジルおじの酒」は、マジックリアリズムとして昭和時代の少し前の移民の体験を語るのであるが、「ノロエステ鉄道」は、リアリズムとしてお年寄りの女の人の回想を描写するのである。その異なる文章を比較しながら、作品のテーマの共通点も考える。特に、目取真と大城はマイノリティーの立場を中心にするので、体験を考察する時、人種、ジェンダー、社会階級などを考慮する。最後に、その沖縄系ブラジル移民文学の作品は、日本帝国、植民地化、資本主義により、沖縄と日本とブラジルとの関係をマップし、そのような覇権的近代のシステムへの疑問を提示する。

現在、「ブラジルおじの酒」に関する”The Transpacific on Fire: Sparks of Decolonial Resistance Across Okinawa and Brazil in Medoruma Shun’s ‘My Brazilian Grandad’s Sake’ (1999)”記事が *positions: asia critique* というジャーナルの編集者と最後の編集しているところである。